

# 2001年 卒業研究要旨

## 子どもの個室と親子間コミュニケーションに関する一考察

清水 克志 (7081-1044)

指導教官 : 笹原 恵

### 研究の背景

私は、部屋の模様替えが好きで、多い時には月に一回くらいのペースで行っていた。それはなぜかと言うと、「自分の空間を創造できる」。これが模様替えが好きな一番大きな理由である。そうした空間の創造と言った点に興味を持っていたので、「住宅」「住まい」といったものに魅力を感じるようになっていった。そして、住宅業界へも就職活動を行い、そして次の言葉に出会った。「人は住まいをつくり、住まいは人をつくる」(積水ハウス企業案内より)。この言葉によって、人にとっての空間とは一体どんなものなのであろうかと思いはじめ、住宅、住まいという人にとっての空間に関することを卒論のテーマとして取り組むことに決めた。

また、住宅の中で特に子ども部屋に焦点を当てたのは、現在少年犯罪が多発しており、その中で「引きこもり」という言葉がキーワードとなっているように感じられるからである。

「引きこもり」ためには個室が必要である。子どもに個室を与えることが、こうした「引きこもり」を生み出す背景となっているのではないか。もちろん、個室を与えただけで「引きこもり」の状態になってしまうわけでもない。つまり、子ども部屋という個室と子どもの関係性、親と子どもの関係性、そして親と子ども部屋との関係性がこうした「引きこもり」などの問題を引き起こすのではないかと私は考えている。こうしたことを考察したい、これが私の論文を書くきっかけである。

### 研究目的

現代において「個室」がいろいろな面で注目されている。例えば新潟での9年間にわたる「拉致事件」など、こうした問題の背景には、「個室」という空間を無視することはできない。また、新潟の事件では、親が子ども部屋の異変にまったく気づいていなかったということであった。9年間にわたって親が子ども部屋の異変に気づかない、そんなことはありうるのだろうか。親が子供に対して全く干渉しなかったということであろうか。または子供部屋を与えること自体に問題があるのだろうか。それとも、部屋を与えた後の親の子供と子供部屋への干渉の頻度、状況、方法などが重大な影響を与えるのだろうか。

そこで親と子どものコミュニケーションといった側面から、子ども部屋という「個室」を分析していくことで、現代社会における問題を少しでも解明できるのではないかと考えている。

## 研究方法

『子どもの個室と親子間コミュニケーションに関する調査』の実施

(調査対象者：愛知県立知立東高等学校の生徒 一年生，二年生：225人)

この調査結果を SPSS で集計し分析を行なった。高校生の個室の使用方法，室内環境，そして親との関係性，両親の関係を分析することによって，現在の高校生における個室の存在意義，そして個室を通じての親とのコミュニケーションのあり方を明らかにする。